「アフリカの真珠」ウガンダより　　2026 年（令和 8 年） 11 月

今月は、ウガンダが長く努力を続けてきた石油開発プロジェクトの現状、また日本の開発協力の考えを世界に広めていく JICA チェアについてのご報告です。

1. ウガンダの石油生産プロジェクトの進捗

ウガンダ北東部、コンゴ民主共和国との国境にはアルバート湖の美しい水面が広がっています。この地域に石油の埋蔵が確認されたのは 2000 年代の後半の事でした。以来、ウガンダは自国の石油開発を進めることを悲願として長年努力を続けてきました。20 年近くかかりましたが、来年半ばには石油生産が始まろうとしています。油田はアルバート湖の湖底に存在するのですが採掘現場はアルバート湖畔の街ホイマ市から車でさらに 1 時間から 2 時間ほどかかる場所に広がります。筆者は今月、プロジェクトの現場を視察しました。

（1）石油開発プロジェクトの概要

ウガンダの石油開発プロジェクトは若干の現地での精製（下流）を含みますが採掘された原油の多くをタンザニアのタンガまでパイプラインで輸送し輸出する、上流から中流までを担うプロジェクトです。石油の採掘は 2 つの地域で行われます。一つはキングフィッシャー・プロジェクト（中国海洋石油集団（CNOOC）が開発を受託。）と呼ばれ今ひとつはティレンガ・プロジェクト（トタルエナジーズが開発を受託。）と呼ばれています。規模は前者が日量 4 万バレルの生産を予定しており、後者は 19 万バレルです。今回視察したのは後者の方です。2 カ所で採掘された原油は一旦、採掘地からホイマ市にほど近いカバレガ工業団地の施設に集められます。ここが東アフリカ原油パイプライン（East African Crude Oil Pipeline:EACOP）の起点です。油田地帯には発掘のためだけに設置されている施設も多いのですが、石油採掘が軌道に乗ったあとは撤去されるこれらの施設と異なり、カバレガ工業団地は恒久施設となります。規模は大きくないものの原油の精製施設の建設も進められています。プロジェクトの一部として国際空港建設が進められており 3.5 キロの滑走路がすでに整備されています。EACOP はカバレガからタンザニアのタンガまで 1443 キロを地下に埋設された直径 24 インチのパイプラインで原油を輸送する壮大なプロジェクトです。途中、いくつかのポンプステーションが設けられます。また原油は重質のためパイプラインを温め一定の温度（約 50～80℃）を保ちながら輸送する計画です。

ウガンダで採取される原油は、ウガンダが「アフリカの真珠」と称されることにもちなんで、「パール・スィート」（Pearl Sweet）と名付けられました。まさにウガンダの長年の夢を実現する、希望にあふれるネーミングといえましょう。

（2）視察の様子

（ｉ）カバレガ工業団地

原油の採掘現場よりもホイマの街に近く、まずこちらを訪問しました。3.5 キロの滑走路の建設はイギリスとイスラエルの企業が請け負いました。ほかの施設に先駆けてすでに完成しておりウガンダ政府への引き渡しが近く予定されています。国際空港を標榜しており、空港建設の主要な目的は工業団地、石油精製施設建設のための資材輸送だということです。施設完成後は工業団地として、また後に述べます観光振興にも活用されるものでしょう。前に述べたとおり工業団地は恒久施設であり、近くで原油の精製も行われる予定です。将来的には単にパイプラインの出発地であるだけでなく、石油製品を活用した工業団地として、また観光客をはじめ近隣地域・諸国からの訪問者の受け入れ玄関口、ハブとして地元経済発展の中核を担うことが期待されています。




［すでに滑走路は完成しているカバレガ国際空港］

(ⅱ)ティレンガ・プロジェクト

今回は2つある原油採掘プロジェクトのうち規模のより大きなティレンガを訪問しました。2000年代に原油が最初に発見された油井はいまでも大切に保全されています。採掘のリグは広い鉱区に点々と存在していました。多くの資源開発の現場がそうですが、こちらでも現場で働く皆さんは 24 時間を2交代で週末もなく働くシステムです。一定期間休みなく現場で詰めそのシフトが終わるとしばらく休暇で現場を離れる、というシステムになっています。技術者の住宅や病院などの関連施設も周辺に整備されていました。採掘現場からはガスも生産されるのでこれを活用した発電のための施設（タービン）なども整備されています。また、多くの周辺の住民が建設工事に携わっています。



［石油発掘のリグ］



［高い構築物は発電タービン］



［技術者の住宅］



［最初に発掘された油井］

EACOP のパイプラインは稼働に向けて最終段階に入っていることから残念ながら実物を視察することはできませんでしたが、EACOP につながる補助のパイプラインの敷設現場を見ることができました。一つの不具合も許されない緊張した敷設作業が続けられていました。



［パイプラインの敷設現場］

（3）プロジェクトの特徴

ー地域住民との共生、環境配慮



［住民開発の蜂蜜］

油田地帯の開発は巨大なプロジェクトであり、もともとこの地域に居住していた住民への配慮、また環境への配慮は不可欠です。実際、施設の建設のため多くの住民が移住したとのことです。住民の移転にあたっては代替の居住施設はもちろん新たな収入源の開発やビジネスの立ち上げ支援が熱心に行われていました。筆者も移転した住民が移住後に生産をはじめたという蜂蜜を購入しました。環境配慮については、例えば開発が一段落し施設が撤去される際には完全に土地を元の形に戻します。国際標準に沿った環境への配慮がなされているとの説明でした。

―石油精製、保管基地の建設

油田地帯の開発が進むにつれて原油を単に輸出するだけではなく地域で精製しアフリカの発展に活用しようとの動きが顕著になってきています。具体的には、ケニアのラム港において大型の石油精製施設の建設がはじめられました。ナイジェリアのダンゴテ・グループが主導し周辺諸国からの出資も検討されているとのことです。またウガンダの首都カンパラ郊外のナムワブラに石油貯蔵施設（カンパラ貯蔵ターミナル）の建設も開始されました。

昨今の国際情勢を見るまでもなく石油・石油製品の安定的で持続可能な供給は再生可能エネルギーの開発と並び依然としてどの国にとっても重要な課題です。このような動きは単なる自国資源への経済主権の主張などといったものだけではなく、現実的な経済発展の基礎を築くための動きだとみることができます。

―ホイマスタジアムの建設とアフリカ・ネイションズ・カップ（AFCON2027）



［ホイマスタジアム］

来年2027年にサッカーのアフリカ・ネイションズ・カップ（AFCON2027）が、ウガンダ、ケニア、タンザニアの3カ国共同開催で6月から7月にかけて開催されます。これに備えてホイマに約2万人を収容できるホイマスタジアムが整備されました。ホイマ市内は現在 AFCON に備えたホテルなどの建設ラッシュです。先に述べたカバレガ工業団地に付属する国際空港が俄然脚光を浴びることとなりました。

空港が活用できれば選手や観客は直接ホイマに降り立つことが可能になります。石油開発プロジェクトが地域にもたらそうとしている効果は当初想定していた以上のものとなる可能性があります。

（4）まとめ

当初の想定よりも時間がかかっているかもしれませんがプロジェクトは良く計画されて進められています。石油プロジェクト自体が地元にもたらす雇用などの創出と来年の AFCON に向けてホイマ付近は大変活気付いています。

報道などによると石油開発プロジェクトによりウガンダは年間2兆ウガンダ・シリング（約5億米ドル）の収入を得ることになるとのことです。ウガンダ国内ではマクロ経済への好影響、国民生活への貢献への期待が日に日に高まってきている状況です。輸出に成功すれば国際収支の安定に資することでしょう。また東アフリカでの石油精製が始まれば持続的成長の基礎がこの地域に築かれることになります。

国際的にみればウガンダの産出量はそれほど大きなものではありません。単一の収入源に期待しすぎることのリスクもあります。来年、ウガンダの長年の夢であった石油生産が始まることは間違いないでしょう。そこから得られた収入を透明性をもって運用し国民生活全体へ貢献することが期待されています。

2. JICA チェア

JICA は 2018 年に「JICA 開発大学院連携プログラム」を立ち上げ、パートナー国で成長と発展を支えるリーダーとなる人材を育成する事業を実施してきています。これらのプログラムを通じ日本が自らの経験を伝え世界の開発学をリードし、国際社会の持続的な発展に積極的に貢献するとともに、日本をモデルとして日本の考え方を理解する人材を世界各国で育成しています。これらの取組により日本がその活動領域を広げる下地となるでしょう。単にプロジェクトを実施するだけでは不十分で「考え方」「やり方」を共有することが重要です。このような考え方を背景に JICA は大使館とも協力して各国のトップクラスの大学などを対象とし日本研究の講座設立支援を行うプログラム JICA チェアを実施しています。

ウガンダにおいても 2022 年以来、過去 5 回にわたり JICA チェアを実施してきました。パートナーは東アフリカ随一の伝統を誇るマケレレ大学です。これまで行われてきた JICA チェアの実施実績について下記にまとめました。

本年は、日本の開発協力の哲学の柱の 1 つである人間の安全保障をテーマに JICA 緒方貞子平和開発研究所長の峯陽一教授をキーノートスピーカーにお迎えし実施しました。

峯教授は 1 時間近く、日本の開発協力の背景にある考え方を学生にわかりやすく説明されるとともに、日本とウガンダを対象として開発指標の研究成果を披露されました。

マケレレ大学からは開発協力を学ぶ学生の他教授、一般学生など 300 名近くの参加者を得ました。講演後の質疑応答では時間を超過するなど熱心に質疑応答が行われました。講演の後には公衆衛生や若者の失業、移住・自然災害に関する分科会に分かれさらに深掘りしたテーマについて討論が行われました。



［峯教授による講演の様子］

マケレレ大学は神戸大学と千葉大学との間で学生の交流を行っています。現在両大学から学部生が留学しています。今回の講演会にも参加していただきました。マケレレ大学内の図書館の一角には日本に関する本を集めた JAPAN　CORNER もあります。

このような交流を通じて大学間、若者の交流が進むことが大いに期待できます。

【ウガンダにおける JICA チェア実施実績】

●JICA チェア第 1 回（2022 年 3 月）
テーマ：第二次世界大戦後の日本外交
基調講演：アンドレア・プレッセロ准教授（Dr. Andrea Pressello）、政策研究大学院大学（GRIPS）

●JICA チェア第 2 回（2022 年 7 月）
テーマ：ウガンダ農業近代化に向けたコメの役割－日本の経験から学ぶ
基調講演：坪井達史氏、ウガンダ稲作開発専門家

●JICA チェア第 3 回（2023 年 9 月）
テーマ：ウガンダにおける包摂的産業構造形成のためのクラフトマンシップ
基調講演：高橋基樹教授、京都大学

●JICA チェア第 4 回（2024 年 9 月）
テーマ：アフリカにおける JICA 国際協力の歴史と最近の動向－ウガンダへの示唆とウガンダからの学び－
基調講演：加藤宏副学長、国際大学（講演題目：「ウガンダ・日本協力の成果と今後の展望」）

●JICA チェア第 5 回（2026 年 3 月）
テーマ：広島の戦後復興の経験を通じた平和構築
基調講演：三上知佐氏、国連訓練調査研究所（UNITAR）広島事務所長（講演題目：「荒廃からレジリエンスへ－広島の経験に学ぶ戦後復興と持続可能な平和」）
（以上）